

新潟市潟環境研究所 第6回月例会議（概要）

日時：平成26年10月15日（水）午後3時～午後5時

場所：新潟市歴史博物館

■会議概要

1 開会

2 報告及び情報提供

「赤塚郷ゆかりの文人展 11月8日（土）・9日（日）」について（太田和宏研究補助員）

3 講義

「低湿地の民俗について—水田及びその周辺の農業慣行を中心に—」

森 行人 外部相談員（新潟市歴史博物館 学芸員）

【明治期の蒲原平野】

・明治44年の亀田郷の新田村の地域景観の特徴の一つとして、砂丘の微高地に沿って線上に集落が位置している。砂丘間に低湿の土地があり水田として開墾されていった。水田を移動するための水路が造られ、耕地に辿り着いて耕作するために舟が必要であった。

【イタアワセ】

・蒲原平野で広く使われた舟にはイタアワセという船型があり、舟底をシキと呼び、舷側に棚板・ホテ板という横板がつき、オッタテと呼ぶ一枚板でヘサキとトモを構成する。

・イタアワセの名称は、使い手によってホンリョウ・ハンリョウ、積載量によって十二俵積み・十俵積みなど様々な呼び名がある。

・田舟と呼ばれる、刈り取った稲を積んで田んぼの中を押し引きしながら移動する舟もある。小型の3m前後の舟で、キツオと呼ぶ地域もある。

・江戸時代、蒲原平野の低湿な土地に新田開発が浸透していった。そのため農業用の木造船が必要となり、需要に合わせて板を接ぎ合わせていく舟が導入された。大きさや形が自由に加工でき、大型の荷舟から田舟まで多様なサイズのイタアワセが生み出されてきた歴史が推測できる。

【低湿地農業】

・低地の開発が進むとともに、傾斜が無く流速の乏しい用水路から水を導水する技術が必要とされた。蒲原平野の低位部でも水路を堰上げして水位を上げて水を押し込んだり、揚水具や足踏み水車を使って水量を上げて水を流した。

・亀田郷の各所で、明治末から大正にかけて排水目的のための動力の用排水機が52基設置された。用排水機が設置されたことで、人力で排水車を回す手間が大きく省略された。戦後、統一的用排水体系が構築され、大型用排水機場が造成されたことにより土地改良が進み、低湿地の乾田化が進んだ。

【集落単位の水利関係】

・長潟と姥ヶ山間で水路をめぐる水争いが行われた事例があったように、たびたび水路の幅や浚渫を巡って村の存亡をかけた対立が起きた。

・水路の普請は水草の藻刈りや江浚い、堀端の植物に至るまで、両村での取り交わしや立ち会って確認するなど、非常に厳密な調整・取り決めが必要とされた。

【低湿地の農村の漁労活動】

・平野部の田んぼ、水路では農民による漁労が行われていた。動力排水機は収穫が終わると止めてしまうので冬は湛水する。春先に水を抜いた時に手づかみやトッコウ漁で魚を沢山取ることができた。

・夏の繁忙期には、夜に釜（ウケ）を設置して朝取りに行くような個人でもできる受動的な漁法が行われ、冬はザイ掘り・カンカンボイのように大規模で行う能動的な漁法が行われていた。

・田及び水路などの水系は、用排水の整備・管理に関して細かい取り決めを設けた高度な社会的空間であり、さらに客土・開墾・漁労・遊びなど多層的な機能・意味を持った空間であると言える。